２０００年度

大川遺跡発掘調査概報

大川橋線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

２００１．３

余市町教育委員会

例　　言

1．本書は平成12年度に実施された北海道小樽土木現業所による大川橋線街路事業に伴う発掘調査概要報告書である。

2．本書は乾　芳宏・安西雅希が執筆編集した。

3．発掘調査及び整理体制

発掘期間　平成12年５月17日～平成12年11月６日

整理期間　平成12年11月７日～平成13年３月31日

事業主体　北海道土木現業所

発掘主体　余市町教育委員会

（１）　大川遺跡服部地点

所在地　余市町大川町１丁目79－１他

調査面積　148 ㎡

（２）　大川遺跡迂回路地点

所在地　余市町大川町１丁目12－１他

調査面積　398 ㎡

（３）　大川遺跡道道地点

所在地　道道豊丘余市停車場線下他

調査面積　657 ㎡

調査担当者　乾　芳宏

調査補助員　安西雅希

発掘作業員　柏谷忠勝、今　和明、渡部昭哉、阿部栄子、内田豊子、北川千登世
久保照代、白銀富子、古田千穂、水田るり子

整理作業　遺物実測　阿部栄子、北川千登世、久保照代

遺物トレース　阿部栄子、北川千登世、久保照代

拓本　水田るり子

洗浄、注記　柏谷忠勝、内田豊子、白銀富子

遺物復元　今　和明、渡部昭哉

遺構実測　乾　芳宏、安西雅希

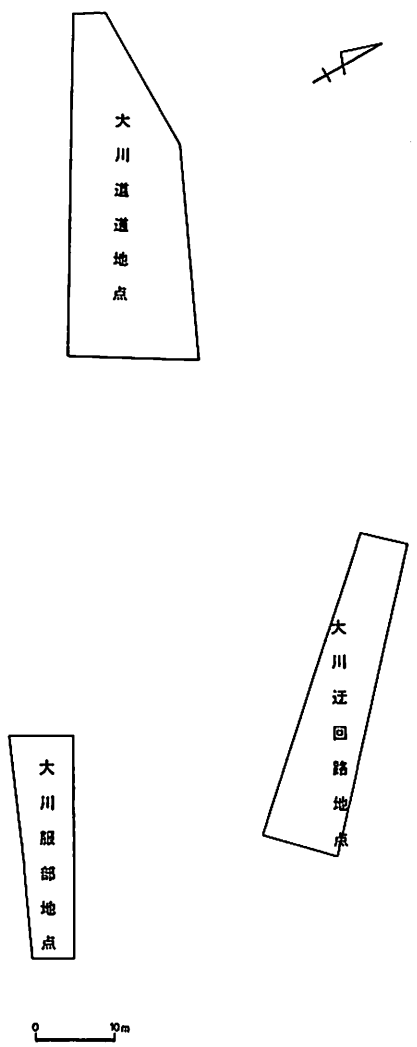
遺構トレース　阿部栄子、内田豊子、水田るり子

4．発掘調査及び整理作業には次の方々の指導、助言、協力を得た。

北海道教育委員会　畑　宏明・大沼忠春・田才雅彦、仁木町教育委員会　嶋井康夫
小樽市教育委員会　石川直章・青木　誠、石狩市教育委員会　石橋孝夫
江別市教育委員会　園部真幸
北海道埋蔵文化センター　越田賢一郎・田口　尚・村田大
立教大学　山浦　清・荒野泰典・蔵持重裕、くらしき作陽大学　北野信彦
東京都立大学　山田昌久、天理大学　藤田明良、名古屋大学　高橋公明
大阪大学　桃木至朗、東京大学　追川吉生、京都造形芸術大学　岡田文男
吉田生物研究所　汐見　真、田部　淳、仲鉢　浩、青木延広、清水俊智（敬称略）

凡　　例

1．本文中で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
　Ｈ（House ）竪穴住居　　Ｐ（Pit)墓壙・土壙　　ＳＭ（Shell　Mound）貝塚
　ＭＯ（Moat）壕状遺構　　ＦＰ（Fire Prace）焼土　　ＦＣ（Flake Chip）剥片集中
2．遺構番号は1999年度大川遺跡発掘調査での迂回路地点・服部地点・道道地点それぞれ各地点での遺構番号の連番とした。
3．実測図の縮尺については以下のとおりである。それ以外の縮尺はスケールで示した。
　遺構　１／20　　発掘区土層断面図　１／40　　土器・陶磁器　１／３
　その他の遺物（石器、骨角器等）　１／２
4．写真図版の縮尺は任意である。



第1図 各地点の位置

大川遺跡調査の概要

1．遺跡の立地と層序

余市川河口から約40mの右岸に位置しており、標高約５mの砂丘上に立地する。

1999年度には住宅移転、橋脚工事の関係により迂回路地点、服部地点、道道地点に区分して発掘調査を行ったが、2000年度発掘区はそれらの地点に隣接しているため地点名を踏襲し発掘調査を行った。

層序は基本的には以下の３層である。

Ⅰ　表土　　攪乱が著しい。

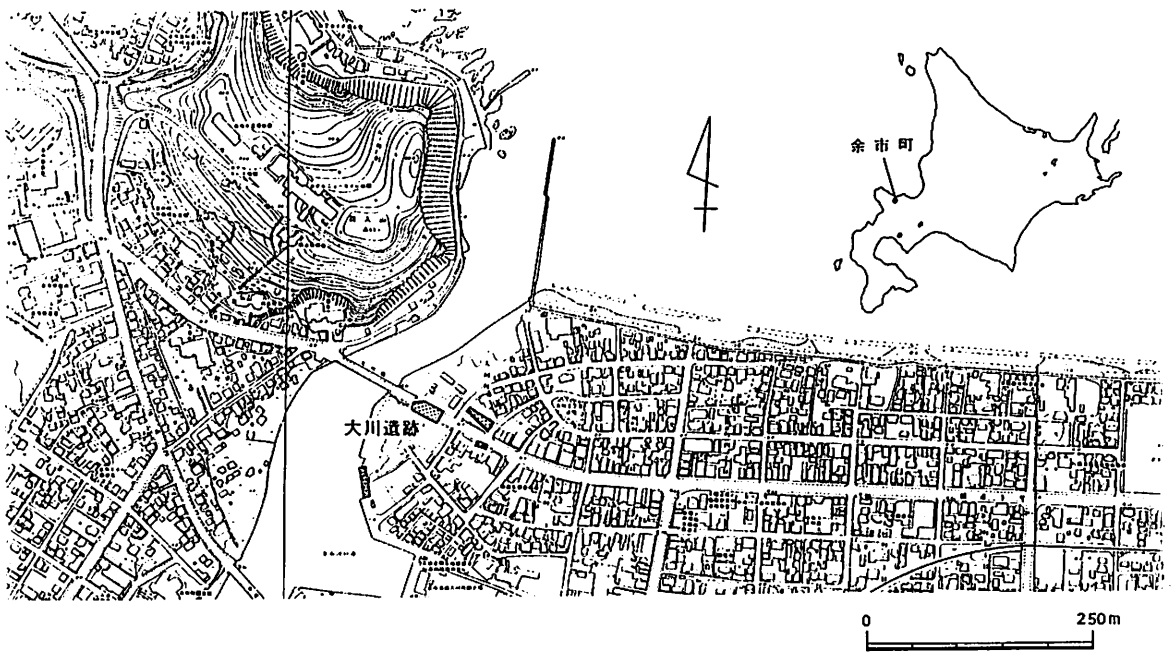
Ⅱ　黒色土層　攪乱が及んでいる。続縄文時代から近世・近代にかけての遺物包含層である。厚さは約0.1 m程である。攪乱が著しい。

Ⅲ　茶褐色砂層　厚さ約0.2 ～0.3 mほどの続縄文時代から縄文時代晩期の遺物包含層である。

Ⅳ　黄褐色砂層　縄文時代晩期の遺物包含層である。上面はラミナが発達している。

2．調査の方法

1999年度の発掘調査時の５mグリッド設定を踏襲し、道道豊岡余市停車場線歩道上の起点を基準とし北西－南東方向にアルファベットを、北東－南西方向にはアラビア数字を付し、その北東交点をグリッド名とした。遺物の取り上げは遺構に伴う遺物や一括遺物を除き５mグリッドを１m四方に25分割した小グリッドを単位として取り上げた。遺構に伴う遺物や一括遺物は地点実測及び写真撮影を行った後に取り上げた。



第2図　遺跡の位置

服部地点の遺構と遺物

（１）遺構の概要

墓壙10基（縄文時代晩期～続縄文時代７基
近世～近代６基）
土壙３基（近代２基、時期不明２基）
貝塚１基（近世末～近代）
焼土１基（時期不明）
石組炉１基（近・現代）
剥片集中１基（時期不明）

縄文時代晩期から続縄文時代に属する墓壙が７基検出されているが長軸・短軸ともに１ｍ内外の楕円形を呈するものと円形を呈すると思われるものが確認された。

近世から近代にかけての墓壙は攪乱によって全体の状況が不明なものがみられるが遺体頭位は南東から南南東の範囲がみられる。

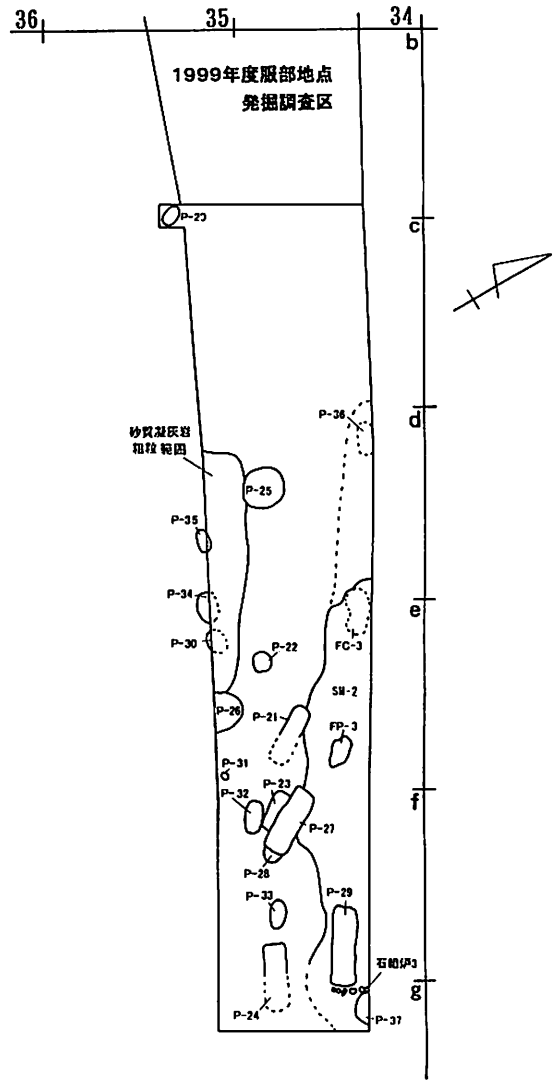
（２）遺物の概要

縄文時代晩期中葉、縄文時代晩期後葉から続縄文時代晩期前葉、擦文時代、近世から近代の遺物が5,843 点が出土しているが主体となる遺物は縄文時代晩期中葉に属するものである。

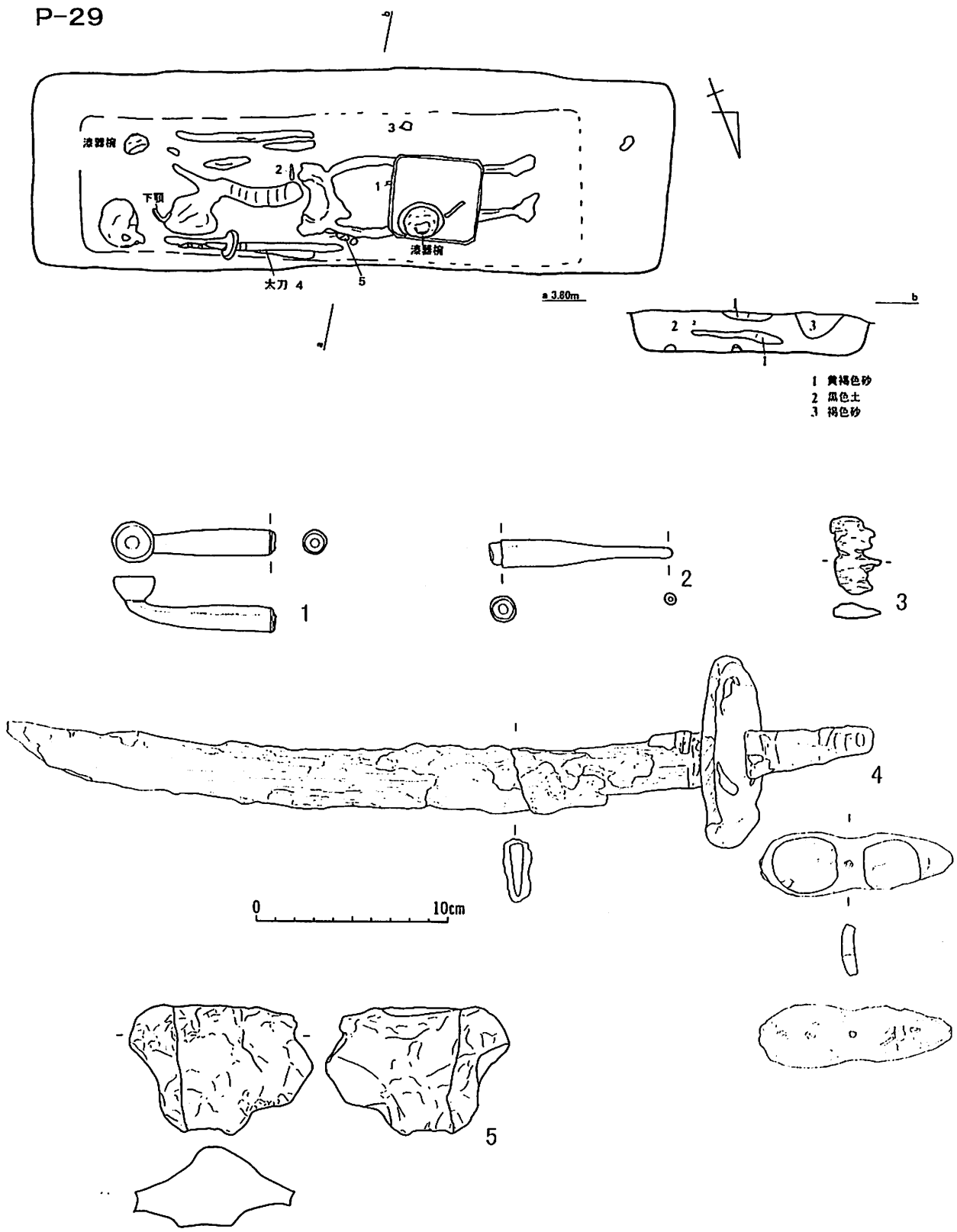
Ｐ－29

ｆ－34グリッドより検出されている。頭位方向東南東の約 2.2×0.7 ｍの長方形を呈する墓壙である。頭部右脇には漆器椀、右脇に太刀、火打ち石と思われる小石、膝上には漆器盆が配され、盆上には天目台・漆器椀が重ねられている。ＳＭ－２を取り上げ後に検出されたことから近世に属する墓壙と思われる。

１は古泉弘氏の分類の第３～４段階にかけての煙管である。３は釘の可能性のある鉄製品である。５は火打ち石と思われる小石である。



第3図 大川遺跡服部地点 遺構配置図



第4図 P-29 検出状況と出土遺物

迂回路地点の遺構と遺物

（1）遺構の概要

墓壙13基（縄文時代晩期～続縄文時代8基
中・近世1基、近世4基）
土壙14基（続縄文時代1基、近世1基
近代1基、時期不明11基）
焼土1基（時期不明）

縄文時代晩期から続縄文時代にかけての墓壙が8基検出されているが川遺跡の墓壙分布の北端に近い可能性がある。

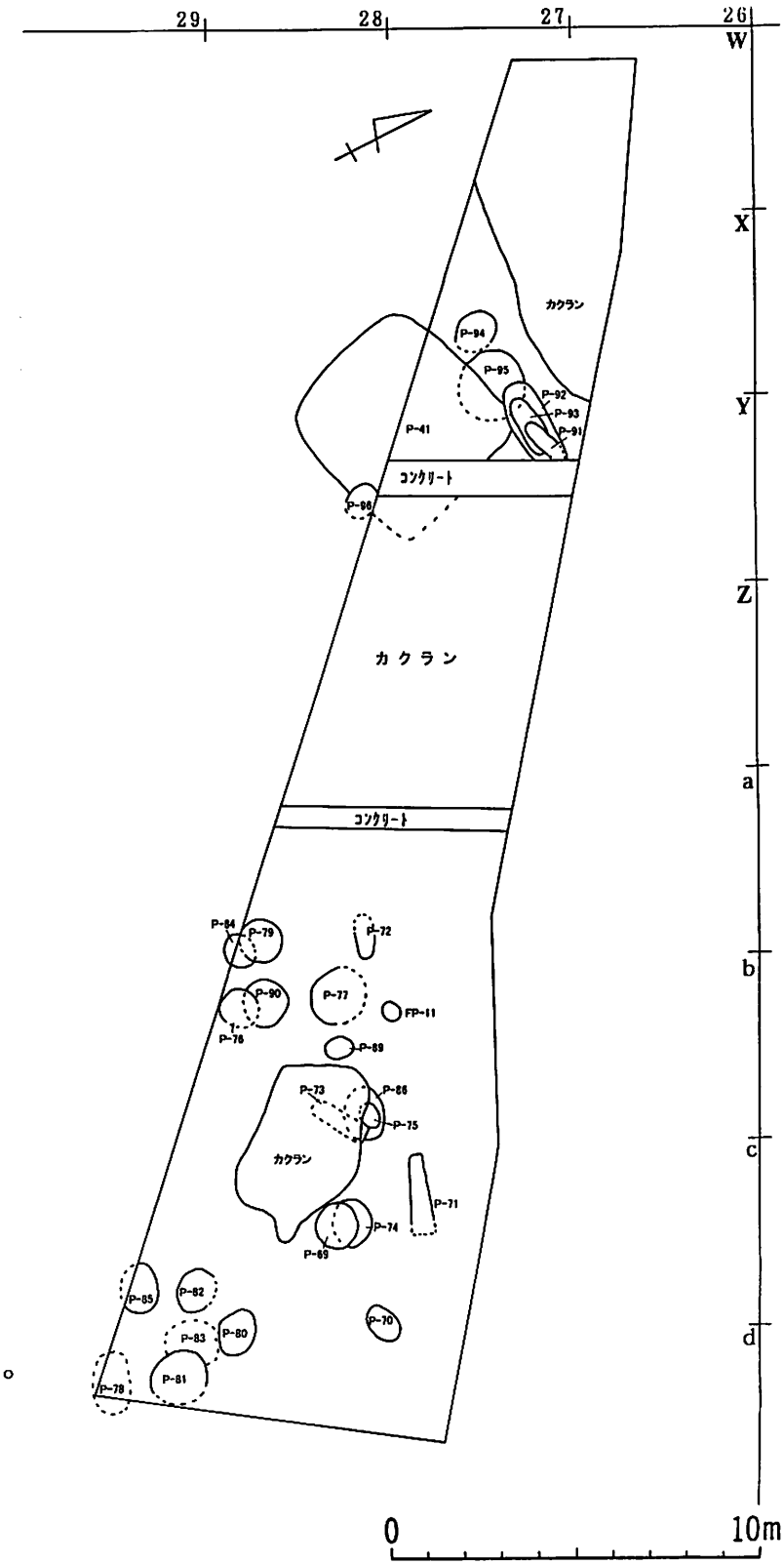
近世に属する墓壙は遺体の頭位は東北東から南東の幅がみられる。

中世に属するP－41より遺体である焼骨とともに太刀・鉄鏃・骨鏃・北宋銭や金属製品・漆器椀が検出されている。遺体は散乱した状態で検出されており意図的に遺体を崩したものと思われる。

（2）遺物の概要

続縄文時代から擦文時代、中世、近世、近代に属する遺物が 6,193点が出土しているが主体となるものは続縄文時代恵山期及び後北C2 式期の遺物である。

陶磁器が 2,156点検出されたいるが殆どが攪乱から出土した近・現代に属する小片である。



第5図 大川遺跡迂回路地点 遺構配置図

P－41

1999年度及び2000年度にかけて調査された墓壙であり約 4.8×4.4 mの隅丸方形を呈すると思われる墓壙である。

壙底には角礫が長方形を呈するように敷き、礫の隙間に漆器椀を配置した後に周縁を灰白色砂で埋め、約 2.8m四方の方形のクリの板材を中央に配置している。板材をの外には安定させるためか礫が配置されている。板材の中に遺体とともに太刀、刀子、鉄製品、骨鏃、骨角器、鉄鏃、金具等を配し焼成を行っている。遺体が散乱した状態で検出されていることから焼成直後に遺体を崩す行為があったと推測される。遺体は頭蓋骨等の部位や太刀や刀子の配置された状況等より２体以上が埋葬されていると思われる。

焼成後灰褐色砂によって墓壙を埋めている。墓壙は本来マウンド状になっていたと思われるが判然としない

P－41は伴出の青磁碗等から14世紀から15世紀にかけて構築されたと思われる。伊達市オヤコツ遺跡より検出の２基の方形配石墓の墓壙形態や伴出遺物に類似性がみられる。

２・３はいずれも頭蓋骨付近より検出された刀子であり、曲げられた状態で副葬されている。７は砥石であり片面が使用されている。被熱により割れた状態で検出されている。14は元豊通寶と思われる古銭である。11世紀後半初鋳の北宋銭である。21・22は骨角製の柄に鉄鏃と思われる二等辺三角形を呈する鉄片をはめ込み鋲状の金属によって固定されたものである。23・24・25は1999年度に検出された鎬蓮弁と双魚文の施された青磁碗であるが同一個体の可能性がある。

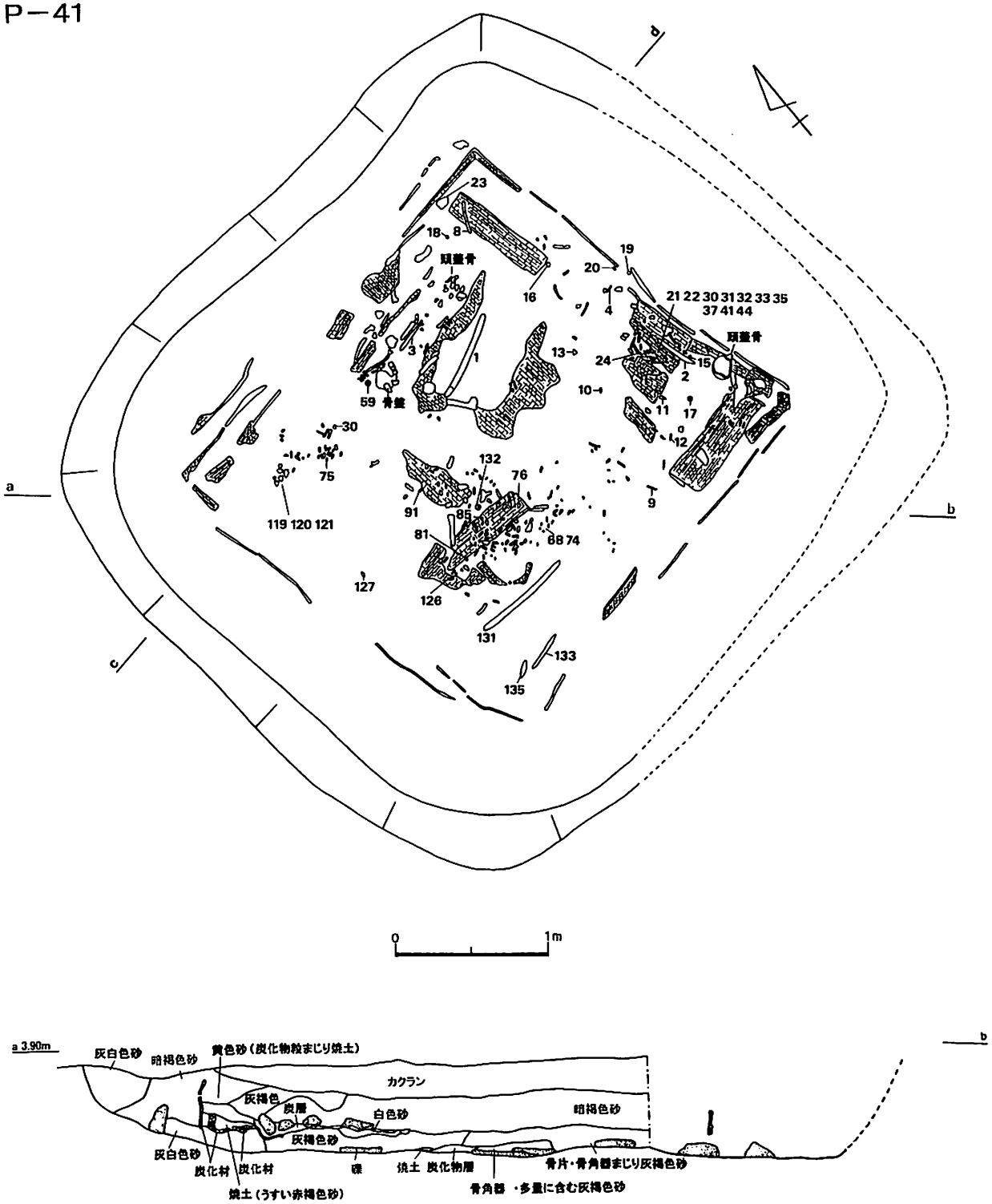
P－94

X－27グリッドに位置する直径約１mの円形を呈する土壙である。覆土より後北C2 式土器が２点と壙底より削器・石斧が検出されている。墓壙とも思われたが遺体は検出されなかった。続縄文時代後半に属する土壙である。

P－95

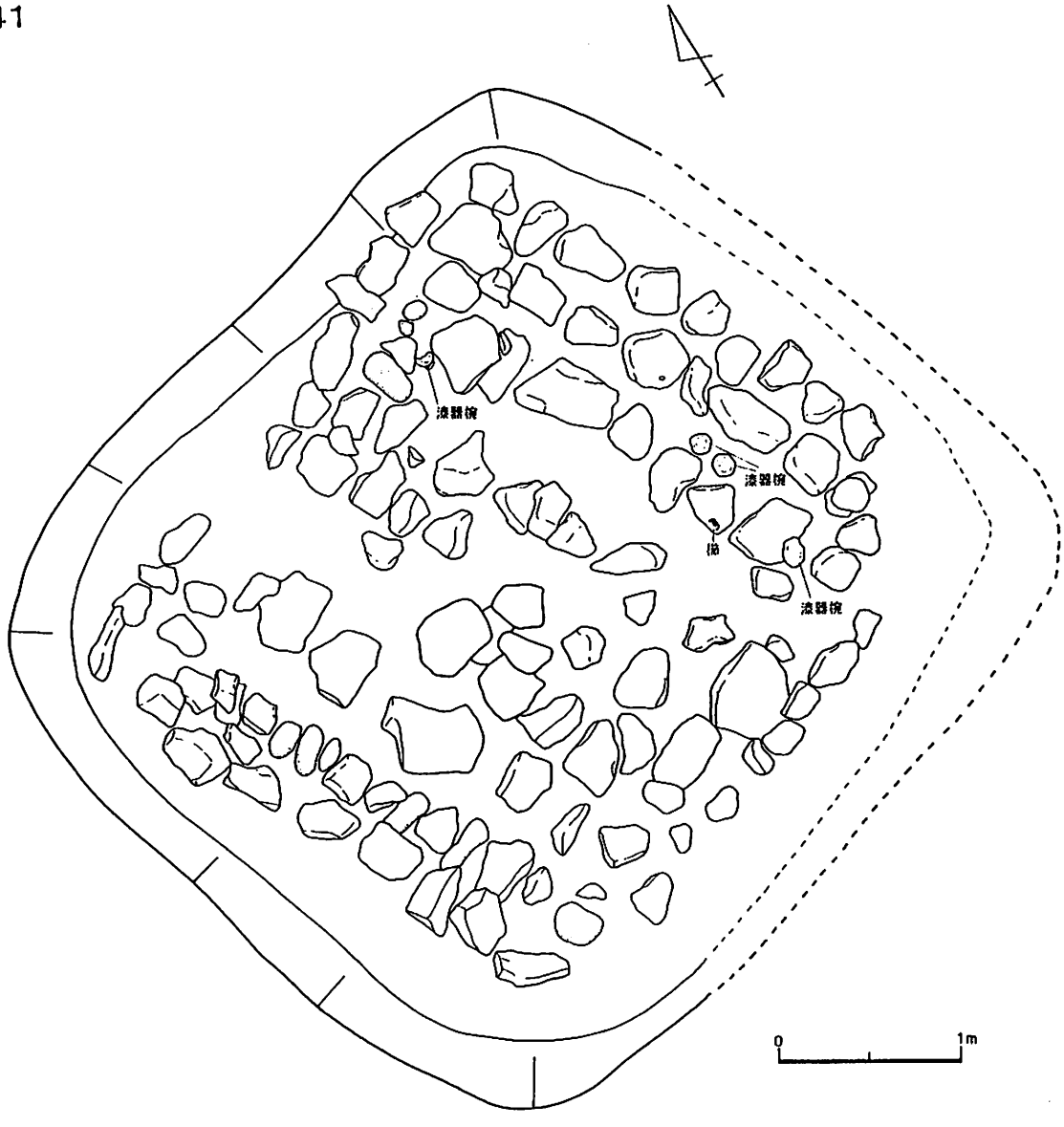
X－27・Y－27グリッドに位置する直径約 1.9mの円形を呈する墓壙である。墓壙南東側より完形の恵山式土器が２点と石英フレイク約10ｇと石斧が、北側より石鏃が６点かたまって検出されている。歯片の位置から頭位は北東とも思われるが判然としない。続縄文時代前半に属する墓壙である。

P－41

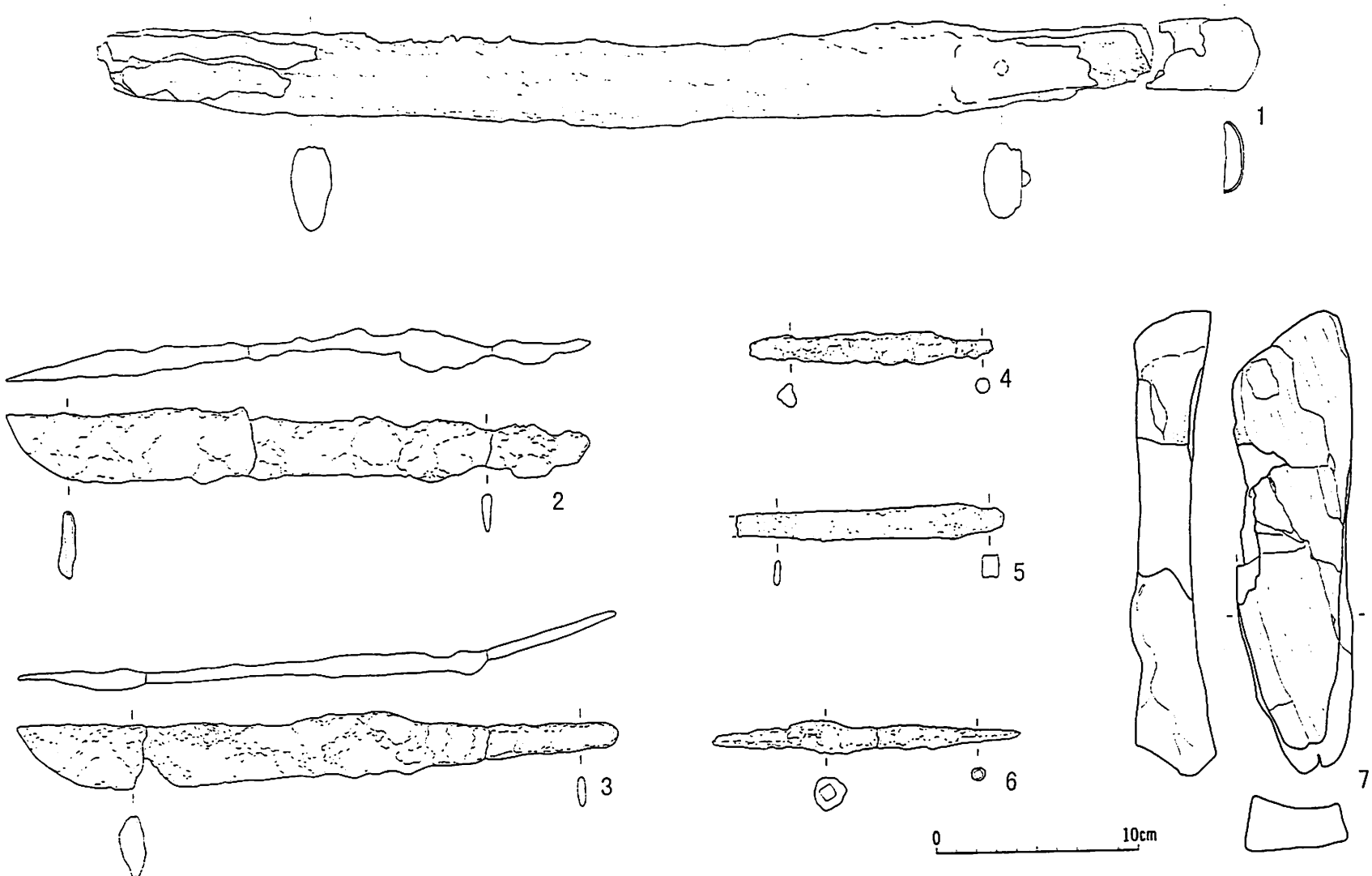


第6図 P-41 検出状況

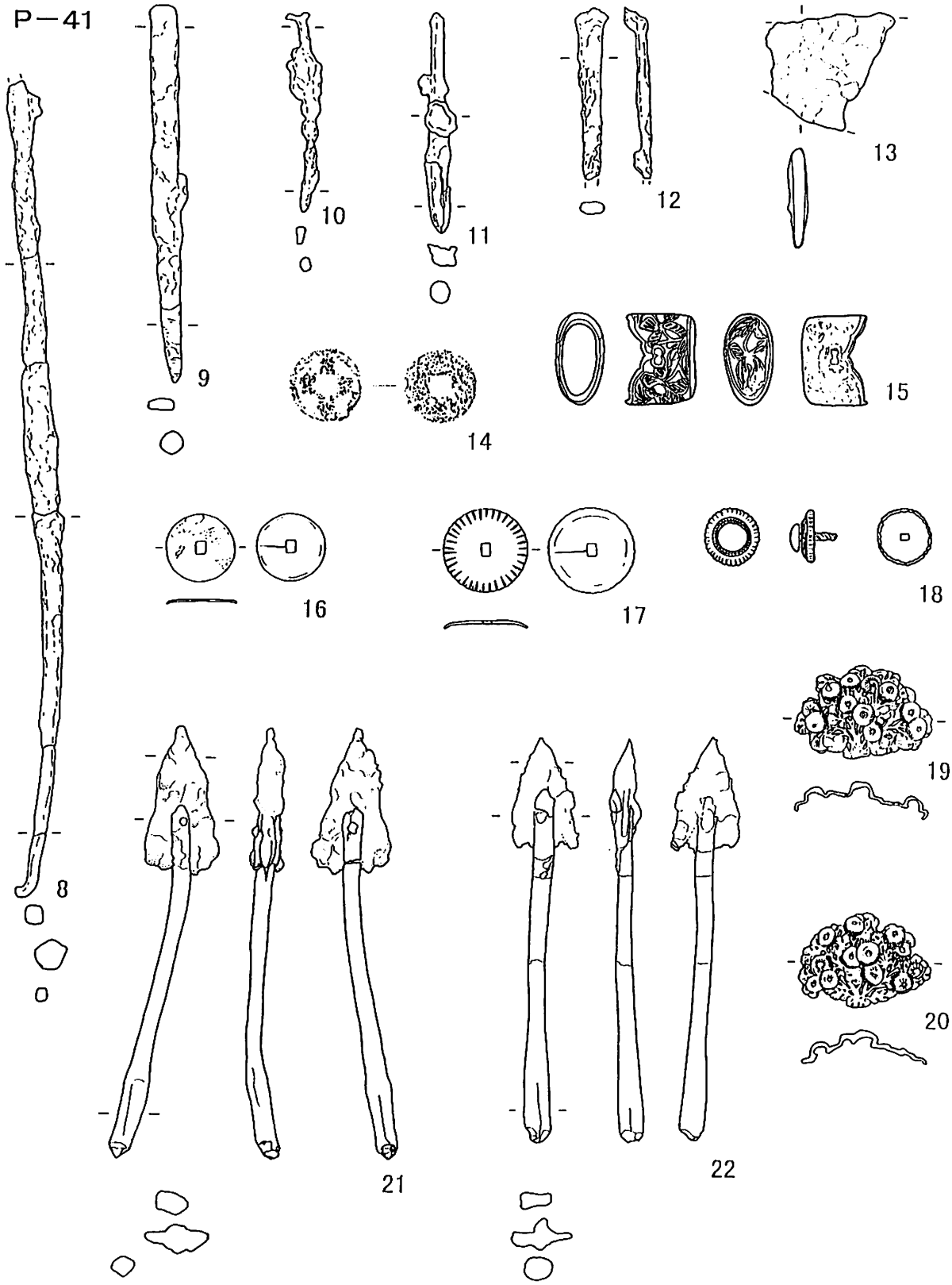
P－41



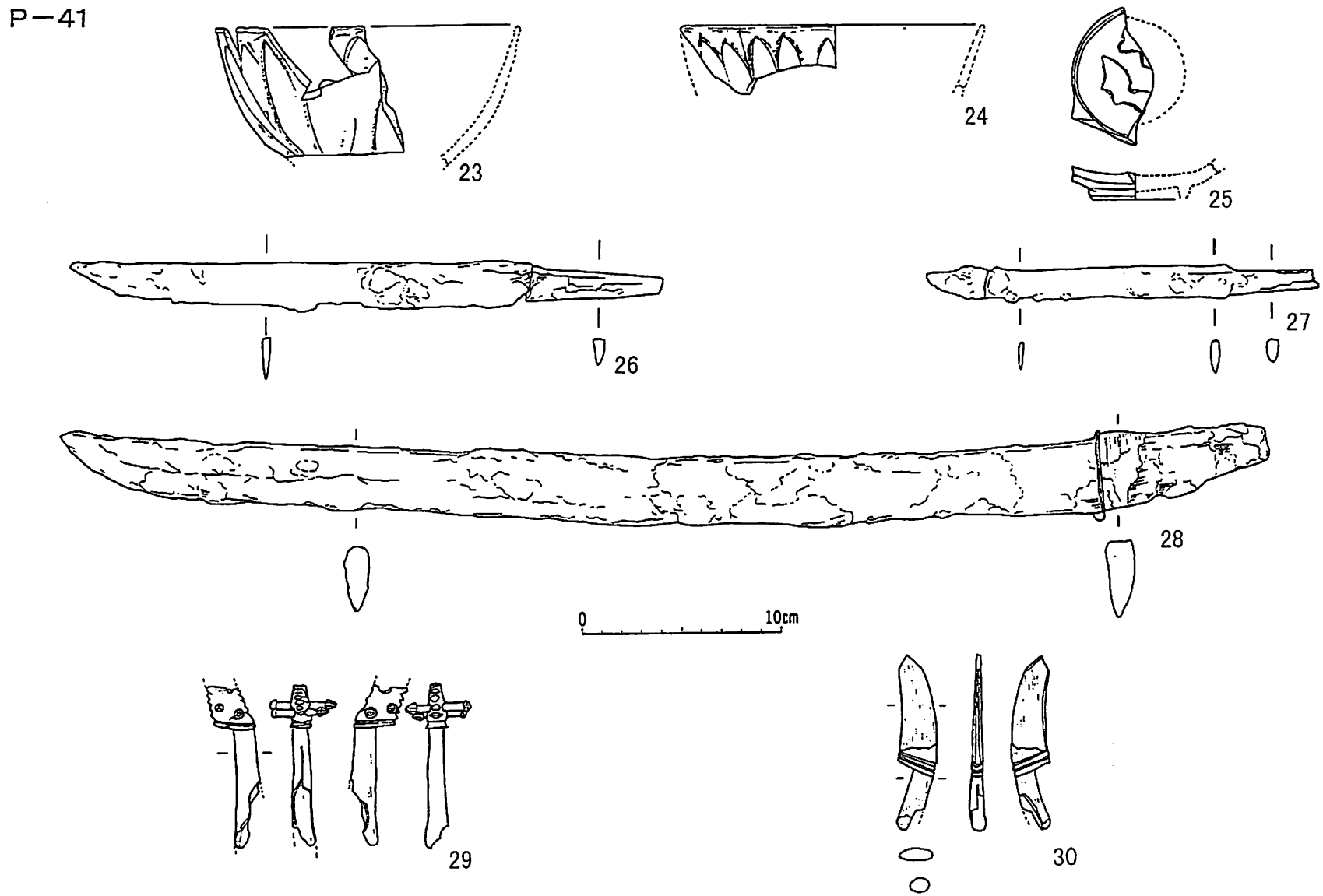
第7図 P-41 検出状況



第8図 P-41 出土遺物

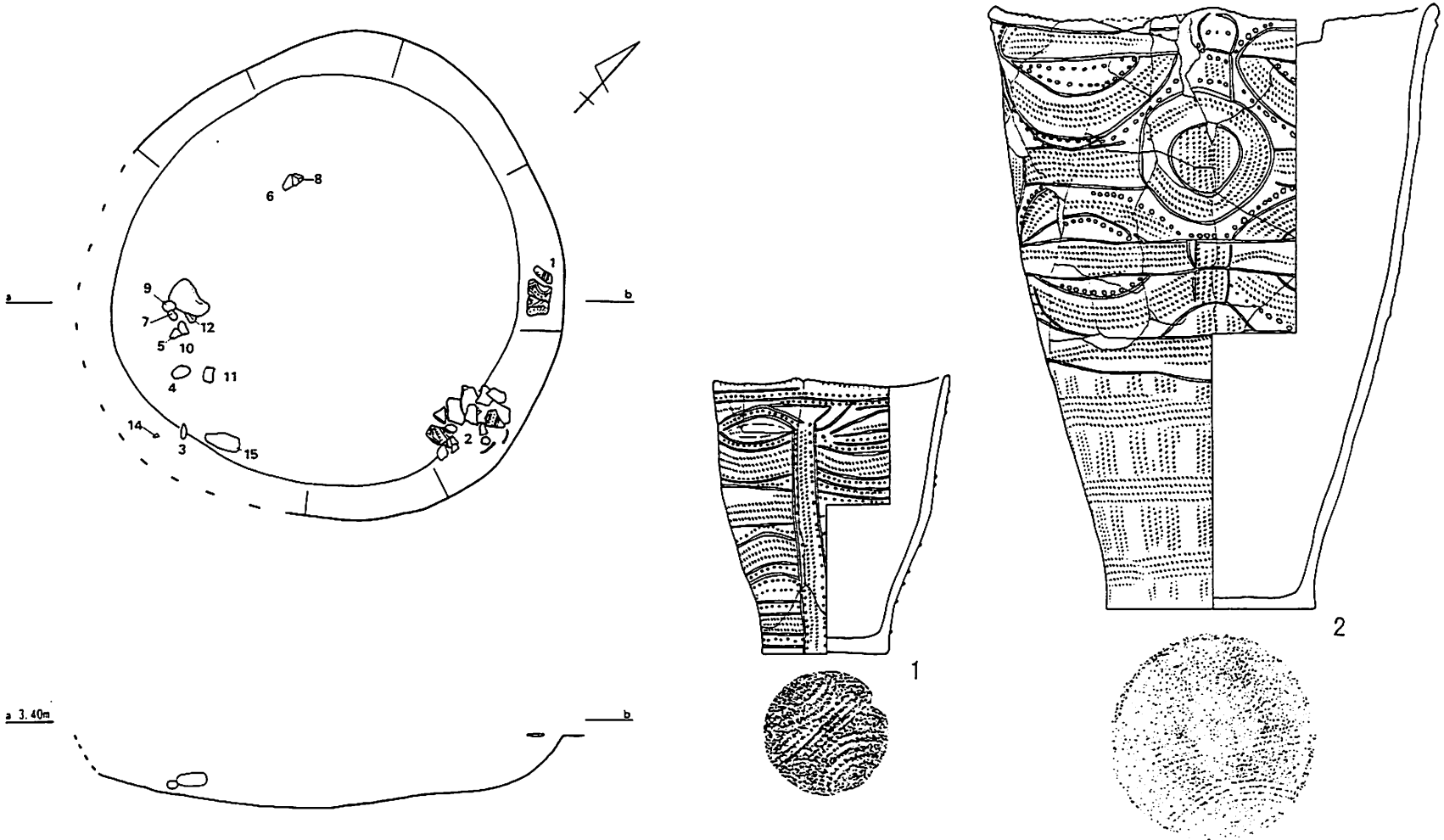


第9図 P-41 出土遺物



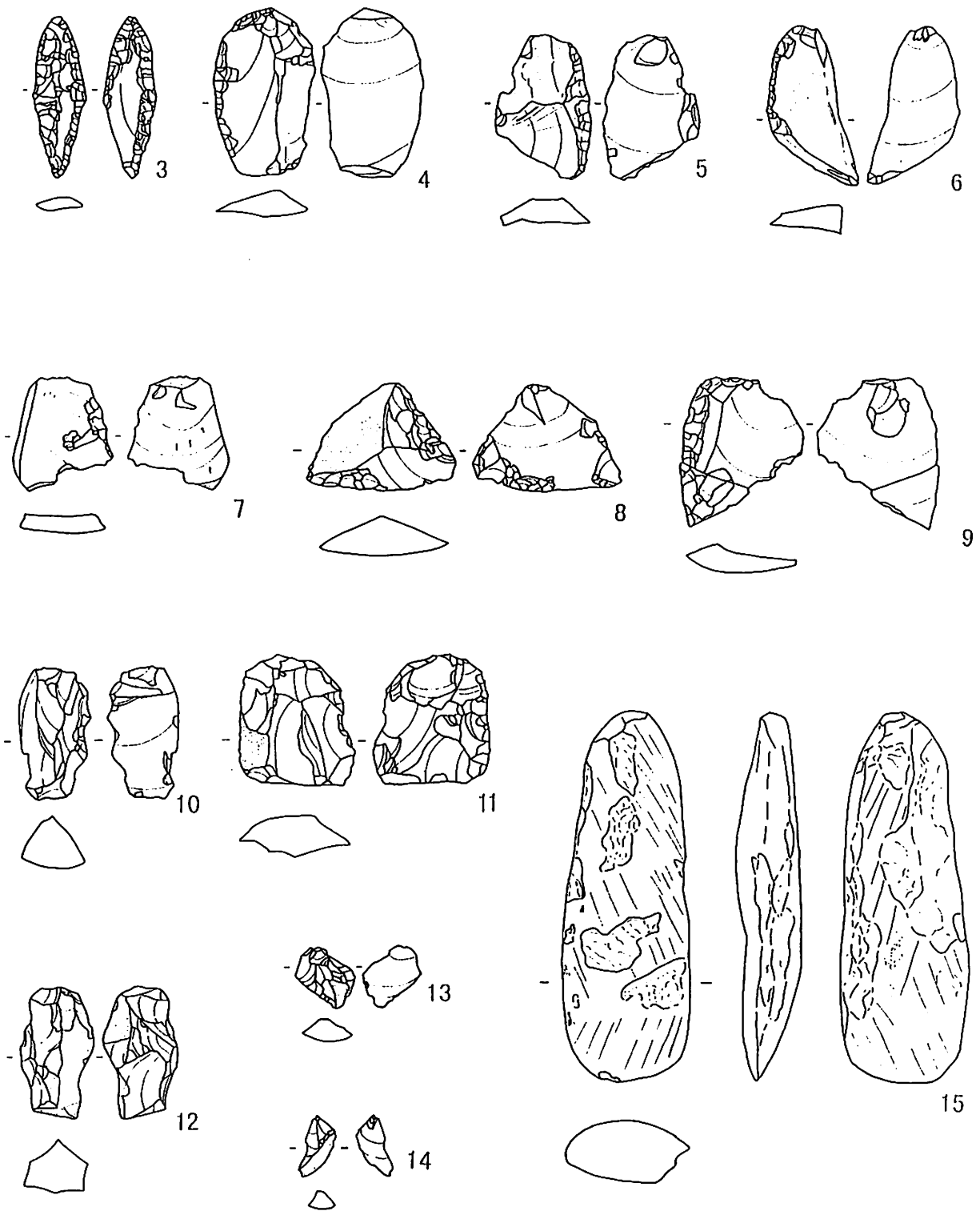
第10図 P-41 出土遺物 （1999年度）

P－94



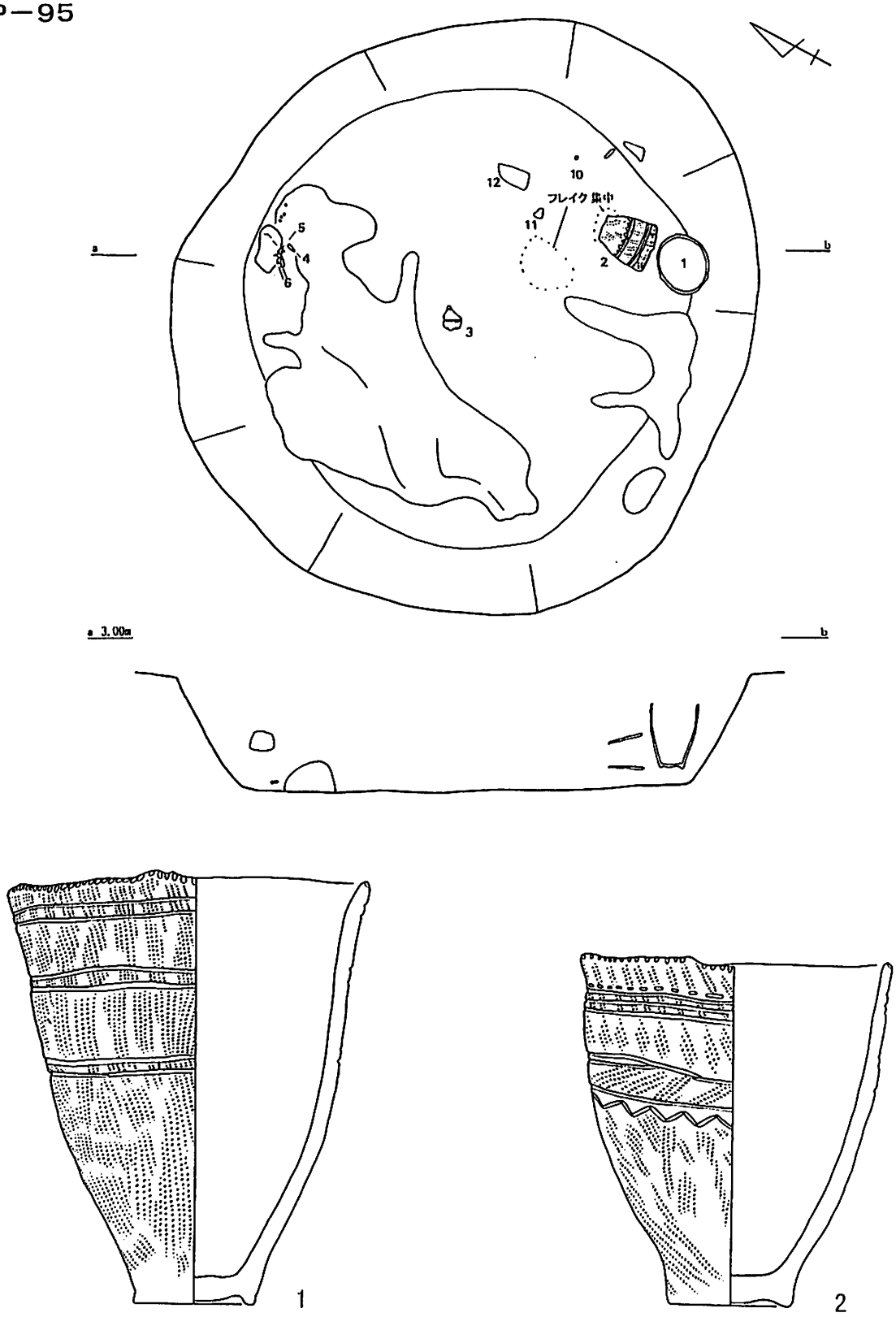
第11図 P-94 検出状況と出土遺物

P－94



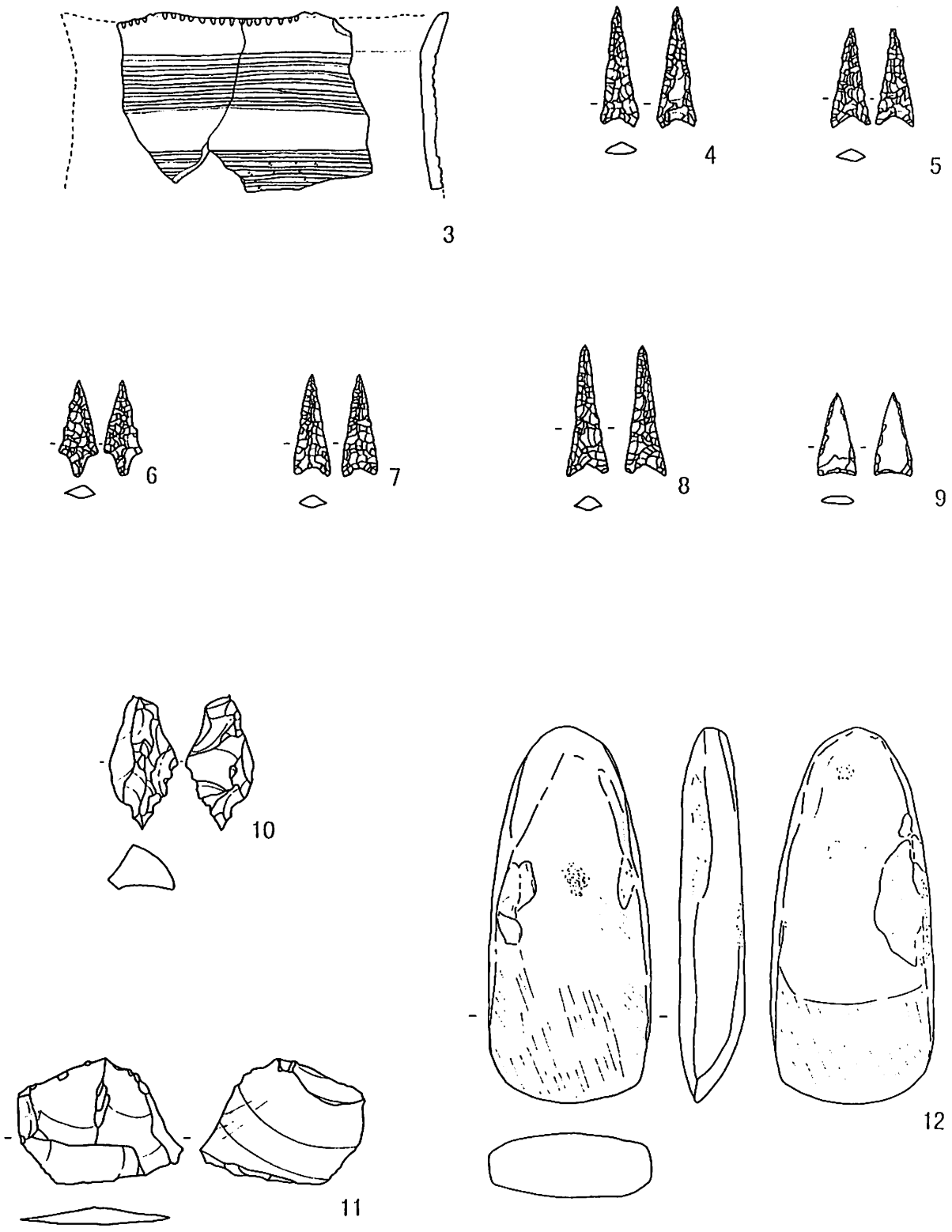
第12図 P-94 出土遺物

P－95



第13図 P-95 検出状況と出土遺物

P−95



第14図 P-95 出土遺物

道道地点の遺構と遺物

（１）遺構の概要

墓　壙　７０基（縄文時代～
　　続縄文時代）
住居跡　　２基（擦文時代）
焼　土　　２基（縄文時代晩期）
壕状遺構　１基（中・近世）
木枠土壙　２基（近　　代

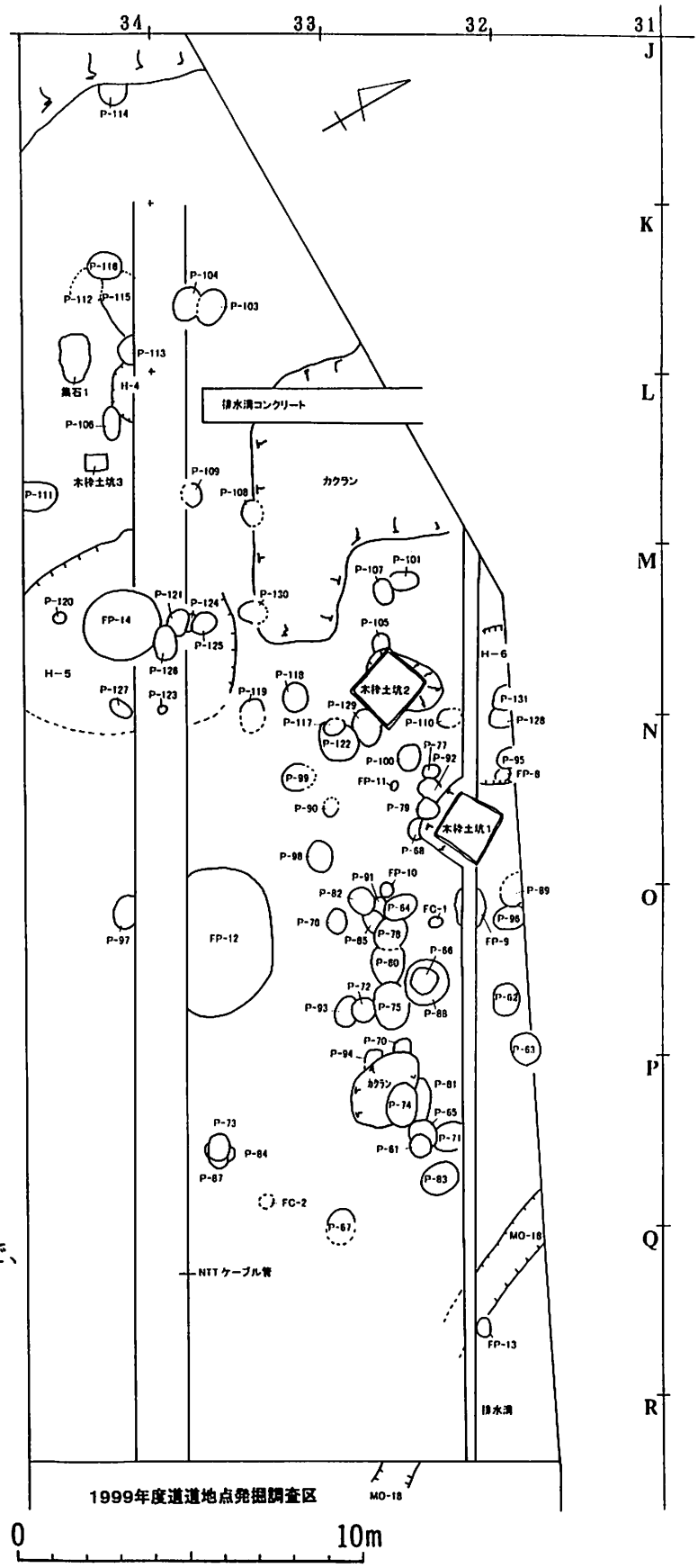
1989～1994年の発掘区間の中間地点に当たり旧現道下で、1999年度の発掘調査区の西続きとなっている。標高約4mの大川砂丘に立地している。

土層では道路によって表土から約１mが破壊され、下水道などによって部分的に撹乱されている。そのために擦文時代の包含層はなく続縄文時代の恵山式文化が主体となっている。

遺構は大半が恵山文化の墓壙であり、重複などの密集地となっている。形態は円形または楕円形を呈し、頭は東位の屈葬で副葬品に土器、石器（石斧、スクレイパー、玉）などが見られ、墓標として大形の自然礫を壙口部に配置している。

住居跡は擦文時代のもので撹乱のため床面がわずかに残されているものでＨ－６は炭化材がある焼失家屋である。

壕状遺構はＭＯ－18に相当するもので、断面はＵ字形を呈し自然堆積によって埋没しており遺物の出土はない。



第15図　大川遺跡道道地点　遺構配置図

写真1　迂回路地点　P－41　検出状況

写真2　迂回路地点　P－41　壙底礫検出状況

写真3　迂回路地点　P－41　漆器椀検出状況

写真4　迂回路地点　P－41　漆器検出状況

写真5　迂回路地点　P－41　遺体検出状況

写真6　迂回路地点　P－41　遺体・太刀検出状況

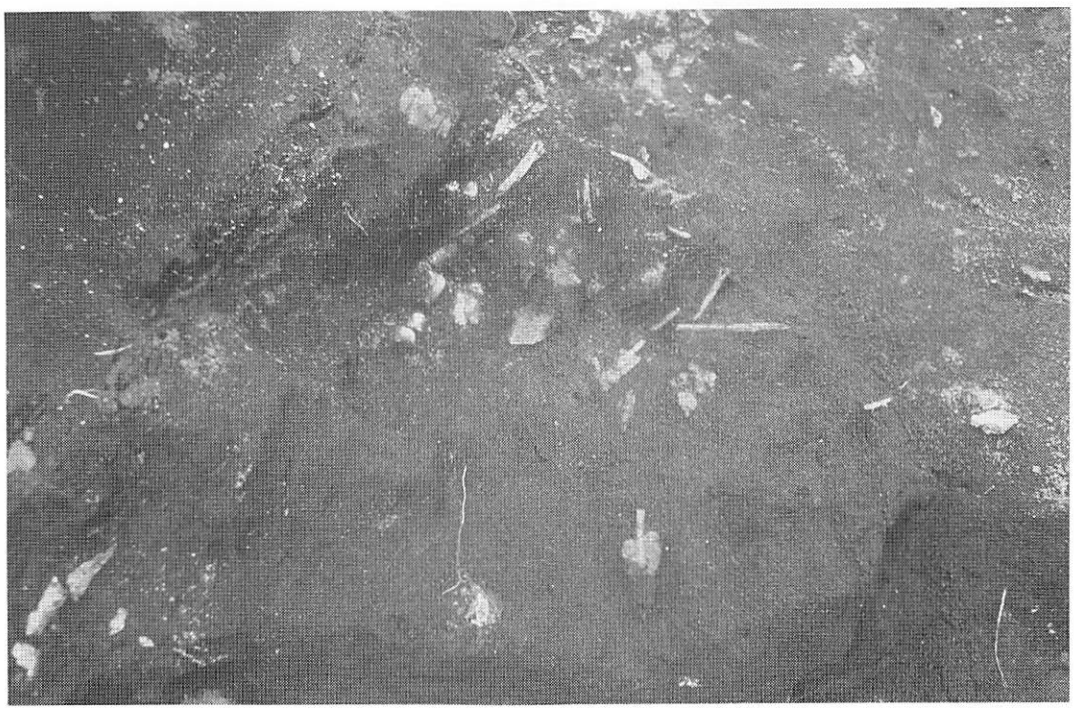


写真7　迂回路地点　P－41　鉄鏃検出状況

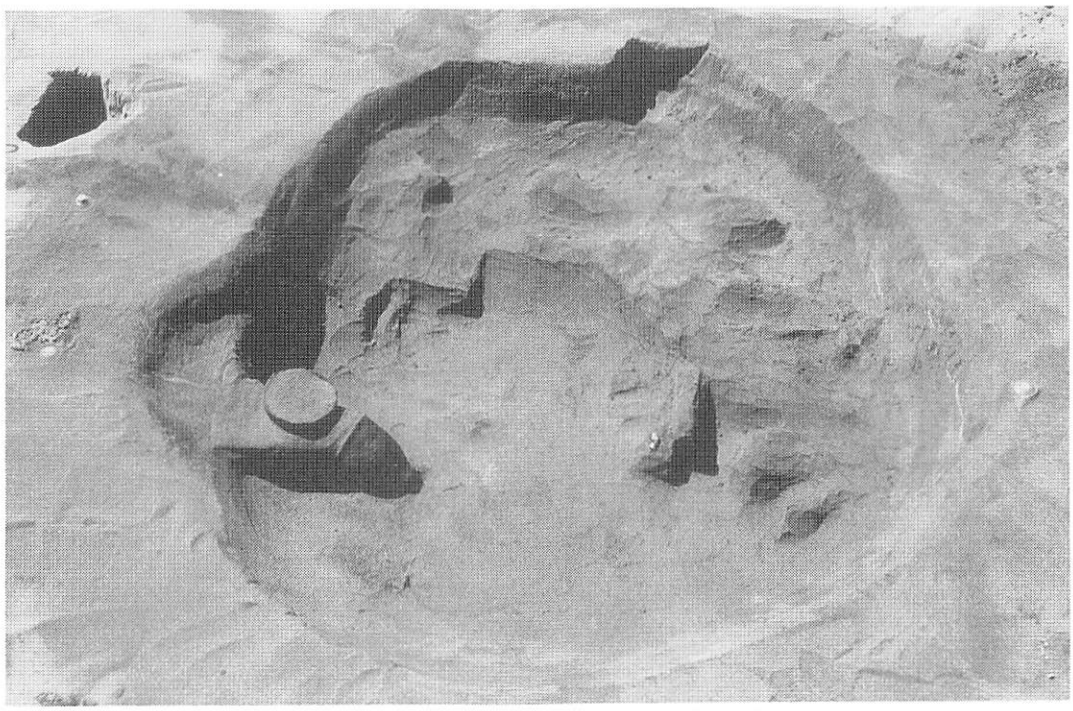


写真8　迂回路地点　P－95　検出状況

まとめ

大川遺跡は１９８９年から今日まで発掘調査が進められているが、大川橋線街路事業にかかる部分において、中世と思われる墓が多数発見されている。特に昨年度のＰ－９、今年度迂回地点Ｐ―４１の方形配石墓の検出は大きな成果であった。従前は珠洲、青磁、古瀬戸などの中世遺物が出土していたにもかかわらず、明確な遺構が確認されず、ようやくその実体が解明されつつある。

また、続縄文時代の恵山文化期の墓壙においては、型式差があまりないにもかかわらず異常なほど重複が多く密集している。このことから墓域が設定されていた可能性があり、遺跡全体を時代及び時期ごとの観点に立脚して墓域の変遷を探る必要があるだろう。

今後は大川遺跡における多くの問題と課題を少しずつ整理し、解決していきたい。

２０００年度

大川遺跡発掘調査概報

大川橋線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

発　行　　平成１３年3月３１日

編集・発行　余市町教育委員会

〒０４６－００１５

北海道余市郡群余市町朝日町２６番地